資料渉猟余話

その129

大正期 旧派俳句会の楽しみ 下

竹村雄次

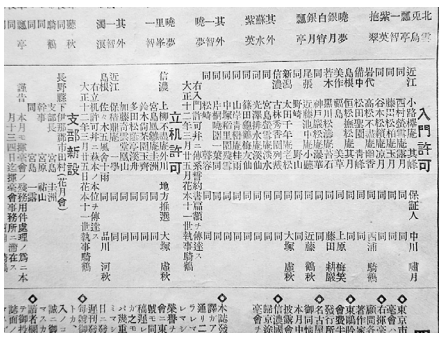
玉齊俳句資料には、「○○宗匠」と記されている人が何人も出てきた。大正期になっても俳句宗匠を称している人が、下伊那には大勢いた。この時期、宗匠には、どのようにしてなっていたのであろうか。

宗匠になることを許されることを「立机」という。立机は、宗匠が弟子を育て、実力がついてきたら、その宗匠が宗匠になることを許す、という形で行われていた。大正期も、基本的には同じであるが、玉齊の立机は全国的な俳句流派からの許可を受けた形になっていた。

玉齊の立机について書かれていたのは、『俳諧鴨東新誌』(以下『鴨東』写真①)という全国版の俳句雑誌である。玉齊俳句資料には、同誌の大正12、13年に発刊された四冊があった。『鴨東』は京都に本部を置く俳句流派「花の本派」の機関誌である。同派は花本(上田)聴秋という宗匠が中心に行っていた。明治、大正の俳句雑誌というと、子規らの『ホトトギス』が思い浮かぶが、旧派側も、このような雑誌を出していた。もっとも、『鴨東』は明治26年刊行と言うので、『ホトトギス』より古い。旧派も雑誌を使い全国展開して、弟子を集めていたのだ。

この『鴨東』48号(大正12年4月号)の裏表紙を開いた見開きに、「立机許可」と書かれた記事があった(写真②)。

写真①『俳諧鴨東新誌』



写真②『鴨東』にあった入門許可、立机許可。支部新設も市田村の俳句会である

そこには信濃の人が五人並んでいた。五人は、「上柳不盡庵外川、宮島鳳雛庵圭洲、鈴木尚茶園玉齊、多田松蔭亭渓舟、加藤奇雲堂凰山」。全員が地方推薦で、推薦者は大塚虚秋。そして、「右立机許可並ニ萩本ノ本位ヲ伝達ス/大正十二年三月二十五日花本十一世執事騎鶴」とあった。つまり大塚虚秋という人が、五人を推薦して、花本十一世(聴秋)の執事(西浦)騎鶴が立机を許可したことになっている。立机者のプロフィールも作品もなく、事務的である。実際は、推薦と書かれているが、虚秋の選んだ人たちが、そのまま宗匠になったと見てよいだろう。あくまで権威付けに花本の名が使われているように見える。

すると大塚虚秋が気になってくる。『伊那の俳人』には虚秋は、露香園。大塚美保。印房。花本聴秋の門に入り、明治44年10月立机。大正4年に龍峡吟社を起こして後進を導いた、とあった。虚秋は花本派に早くから関わり、下伊那で同派を広める活躍したということになる。実際、この『鴨東』の立机許可の前にある入門許可にも推薦人に虚秋の名が見え、信濃の人が八人、入門している。虚秋の努力によるものであろう。

一方、この時に立机した五人の内「外川、渓舟、玉齊、凰山」は、『伊那の俳人』に紹介があった。玉齊は上で紹介したが、渓舟は多田宗吉という箕瀬の人で、玉齊と青瓢社を組織した。箕瀬の多田家であり、調べたところ、「飯田娘」などを作詞した多田三七の父ということである。

また、凰山(鳳山)は加藤直之という尾林の人で篆刻もした、とある。尾林焼にも関係した人のようだ。

そして、もう一人、外川。彼がここにいることは、注目したい。『伊那の俳人』には外川は、上柳緑。別号、不盡庵、平洲、喜茂。慶應元年10月、飯田町伝馬町の質商の生まれ。俳句は花本聴秋に師事、大正12年5月立机。著書に天龍峡等あり、とあった。しかし、外川はここに記されただけの人物ではない。

上柳緑と言えば、飯田町長を大正6、7年に務め、経済面でも活躍をした人物である。また、紅雲の名で新派俳句会の松聲会に入会。その後も、長らく新派で活動をしていた。それが、旧派俳句会に入り、宗匠になった。新派から旧派へ鞍替えをする人がいたという例になる。旧派の俳人の中に、外川の活動に関係する人がいたのであろうか。あるいは、純真に「宗匠になりたい」という思いからの旧派入りなのかもしれない。宗匠という肩書がまだ、尊ばれた時代なのであろう。

今回は、玉齊俳句資料から、句会と宗匠を見た。まだ、数々の発見があるだろう。同資料が、大正期の俳句史を捉え直す契機になりそうだ。